

第3回国学研究会

吉田麻子著『知の共鳴：平田篤胤をめぐる書物の社会史』書評会

平成23年度から3か年の研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」では、学内でさまざまに行われている国学研究が相互に交流できる拠点の構築を目指しており、この中で、学内・学外の国学研究者および関連分野の研究者のあいだでの研究交流や情報共有を目的として国学研究会を開催している。今回は、その第3回研究会として、2012年7月に刊行された吉田麻子氏の著書『知の共鳴：平田篤胤をめぐる書物の社会史』について、著者を招いての書評会を行った。当日の概要は次の通りである。

日時：平成25年2月8日(金)13:30-17:30
場所：國學院大學学術メディアセンター5階会議室06

報告者：松本久史（本学神道文化学部准教授、本機構准教授〔兼担当〕）—国学史から、一戸 渉（金沢大学准教授、本機構共同研究員）—書誌学から、小田真裕（一橋大学大学院、本推進機構研究補助員）—地域史から、小林威朗（本機構PD研究員）—神道史から、三ツ松誠（日本学術振興会特別研究員、本機構共同研究員）—思想史から、遠藤潤（本機構准教授）—宗教社会史から

リプライ：吉田麻子氏

司会：武田幸也（本機構研究補助員）

このように、今回の研究会では、本研究事業に関わるメンバー（専任・兼任教員、PD研究員、研究補助員、共同研究員）がそれぞれの立場から評者および司会を務めた。

松本は、冒頭で自らの研究のスタンスを紹介し、荷田春満から賀茂真淵までの国学の展開を中心に進めてきた自らの研究で留意して

きた点として、(1) 同時代性を重視すること、(2) 受容の立場を重視することをあげた。そして、これらの点において吉田氏の研究とまさに「共鳴」し合う部分は多いとした。

このような観点から吉田氏の業績を検討するならば、画期的な点としては、平田国学における書物出版と受容者の意図の関係を明らかにした点をあげることができ、本書出現以降の平田篤胤および平田国学の研究は、篤胤の著述について、版本／写本の区別や刊行時期の特定、また具体的な普及のあり方などを参照せずに進めることはできないとした。さらに篤胤以外の国学研究の方法に対しても益するところが大きいと指摘した。

その上で、課題としては、著述そのものの内在的理解を目指す立場から、どのような方法を採用していくのかということが残されているとした。すなわち、篤胤の思想の内実を吉田氏が具体的にどのようにとらえているのか、という点について質問を提示した。また、平田派と他の門流との関連性が見えてこない点が気になるとし、この点についても現段階での吉田氏の見解を問うた。

一戸は、企画者から課せられた「書誌学」という視点について、自らの立場を日本文学と措定した上で、文学研究の視点からの書誌学的知識の必要性和意義について最初に説明をした。その上で、吉田氏による本書は、書物をとらえる重点を〈表現主体〉から〈受容主体〉へ移していることにおいて、ロマン主義的な作家・学者像と訣別し、知の媒介物として書物をとらえているとした。また、吉田氏による篤胤関係の諸本調査については、今

日を近世文学研究で最初に行うべき文献学的検証がここでも適用されていると指摘した。また、吉田氏が篤胤の著書に関する木活字本の無断刊行を考察している点に関連して、中野三敏が木活字本の特性と利点として、板木が残らないこと、それゆえ営業形態としての出版を構成せず、出版条例が適用されないことを指摘していることに触れ、吉田氏による紹介はこうした中野の指摘を裏づける具体例として貴重であること、また、刊行の統制について、幕府あるいは書物仲間ではなく、気吹舎が行っている点が興味深いとした。近世における国学と出版の密接な絡み合いについて、一戸が自著『上田秋成の時代』の中で指摘するように、それは18世紀後半から顕著になり、特に宣長において明確だとした。

疑問点としては、気吹舎の出版物がとった形態や摺りに関する気吹舎と摺り師のあいだの違いなどについて質問した上で、より根本的には、平田派の特徴として私家版を貫いた点があげられるが、それは状況に強いられた要素が強く、「知の共鳴」は結果的に生じた草莽のものだったのではないかと問うた。

小田は、自らが地域史研究の視点から地域指導層の学問受容を研究しており、フィールドとしては下総・筑前を扱っていること、また方法としては書物研究と地域社会研究の双方を意識した研究方法を採っていることを紹介し、本書が、下総というフィールドおよび「書物の社会史」という方法の両方で自らの研究と重なりと述べた。そして、こうした重なりが特に濃い第一部第一章および第三部第一章について吉田氏の論を詳しくまとめた上で、吉田氏独自の「書物の社会史」は書物・出版に着目した近年の研究動向にインパクトを与えるものであるとした。また、テキストの内在的理解という方法については、松本と同じく、現時点での戦略を問うた。

他方、課題としては、地域からの思想史あるいは地域への思想史として、思想・学問を

めぐる地域社会の状況の総体との関係や平田国学の展開の以前・以後の状況も顧慮する必要があるとした。さらに、「知の共鳴」というとらえ方は平田国学以外にも有効なのか、書物に特化した分析の有効性とそこから欠落する要素は何か、また、受容主体に注目する際に、その要求を考えるためにはどう読んだかを考えることが有効なのではないか、などの点を論点として提示した。

小林は冒頭で、自らの根本的関心は神葬祭にあり、それに関わって神道における靈魂観を考えるために『靈能真柱』を研究したところから自分の平田国学研究が発端したが、前後して岡熊臣や維新期に宣教使として活躍した人物にも関心を持っており、今回の書評に際しては、「書物を中心にした気吹舎の活動と明治維新宣教使の活動の連続性」という視点を設けたと述べた。この視点からすれば、本書の重要な点は、(1) 篤胤・鋳胤の巡遊、(2) 気吹舎の出版構造、(3) 門人拡大と講義、(4) 学問形成過程、の各点にあり、それぞれ自らが示唆を受けた点を示し、気吹舎の書物中心の活動と明治の宣教使の活動との間に連続性が認められるのではないかとした。

三ツ松は、吉田氏による本書刊行の意義について、近年の平田国学研究を牽引してきた同氏の業績が参照しやすい形にまとめられたこと、近世文学研究者の吉田氏が思想史研究に踏み込んだことをあげ、気吹舎関係史料の調査にもとづく思想史研究の開始を示すものとして本書を位置づけた。その上で、吉田氏は史料調査にもとづく研究を必須とする一方で、著者独自の全体像が提示されていないのではないかと指摘した。また吉田氏による篤胤の著書の具体的理解について、思想史的観点からまがつひ神の問題や「御民」「みよさし」論について疑問を提示した。

遠藤は、冒頭で「書物の社会史」の内容について、ロジェ・シャルチエの所論のうち、書物が著されてからモノとなって読者の元に

届き読まれるまでの全過程が「意味が構築される空間」だとする視点の重要性を指摘した。その上で、これまでの自らの平田国学研究をふまえつつ、篤胤や鏡胤を評価する際には、同時代において神社・神職に関わる社会的位置にいたことを重視すべきであり、純粹な言論としてだけでなく、吉田家や白川家との関係においてその思想内容を考えることも必要だとした。また別の例として、篤胤の仏教批判の言説は、篤胤に対する仏教系からの反批判のとの相互関係において理解しなければならないことを示した。このように、社会史をふまえた篤胤の「学問」の内在的理解について、方法論的な問いをも投げかけた。

著者の吉田氏は、当初妖怪や奇談への関心から平田国学研究へと歩みを進めたこと、また現代の出版活動に触れる機会が多く、書物の成り立ちに関心があったことなどから、本書に結実するような研究傾向へと進んでいったことを説明し、各評者の問いに答えた。

平田国学の受容者の問題に関して、読者が実際にどのように読んだかという点については、直接的な感想文のようなものがないと詳細には把握できず、具体的に論じることはなかなか難しいとした。これに関連して、「書物の社会史」という方法は他の国学者にも適用できるだろうかという質問があったが、吉田は、対象とは別個に方法論が先に立ったのではなく、平田神社に所蔵されていた約10,000点もの史料を前にして篤胤を研究する過程でこういった方法をとることになったと説明した。吉田は、方法の問題から内容へと説明を進め、この膨大な史料を網羅的に見ていくなかで、研究に求められるのは、従来の思想史研究でともすると見られるような「上から目線」で平田の思想を裁断することではなく、当時の当事者には実感として（周囲にあるものとして）神や妖怪あるいは奇談

があるということ、対象に寄り添って理解し位置づけていくことであると考えに至った、それゆえ、自分の研究は宣長・篤胤の思想史的位置づけをめぐる論争に加わるというより、篤胤にとっての神の実感はどのようなものなのかを明らかにすることを意図している、とした。吉田は『鬼神新論』の自らの分析を例としてあげ、神観に関する宣長との対比ではなく、篤胤の特徴を捉える必要があったのであり、その結果『鬼神新論』における篤胤の神観にはある種の原始性（幼児のように素直なもの）を見出したと述べた。今後も、複数の著作の記述をつなぎ合わせて篤胤像を仮構するのではなく、個々の著作の文脈を意識して分析する必要があるとした。

三ツ松は、政治意識の観点から、民俗に対する篤胤の関心は排外意識や差別につながらないのだろうか、と問いかけ、また「御民」意識の理解をめぐって、吉田が本居宣長撰述の林崎文庫碑文設置に関する交渉過程を検討して、屋代弘賢のような幕府関係者にとって「御民」概念が排除すべき危険なものだったと説明したのに対し、弘賢は「御民」の語を否定せず、むしろ宣長門人が師を「御民」と呼びたがらなかったのではないかとの説を述べた。これに対して、吉田は前者については篤胤に排外意識がなかったとはいわないが、それだけで結論づけても篤胤の思想を理解したことにはならないのではないかと反論した。また、後者については、史料の具体的な検討ができないこの場で議論することはできないとした。

また、篤胤の思想を同時代にどのように位置づけて理解するか、という点については、吉田は篤胤による旅先などでの奇談の記録と、それと同じ時期に各地で編纂された地誌への奇談の採用・収録との関連性を指摘した。（遠藤 潤・三ツ松誠）